

## タンセキ



星野志朗

(三省堂国語教科書編集委員)

一九七〇年に大阪で開催された万国博覧会のモニュメント『太陽の塔』は、岡本太郎画伯の手に成る建造物である。この空間芸術の制作中のこと、心血を傾注するのあまり漏らしたのが、「余命タンセキに迫る。」の一句であった。これを下回りの学生が、先生はタンセキなのかと訝ったという事は同音異義ゆえの取り違えですませられる話ではない。文脈まで無視されて、「旦夕」が「胆石」となった漢文埒外世代とのギャップが生んだ行き違い。そこからは、共通語を喪失した人の世の軋みが聞こえてくる。

この話から十年余り遡るが、あるお宅を訪ねたときのこと。用談の途中で先方の老婦人が、「そのタツペキユなことといったら、お前さん」と真顔になった。初めて耳にすることはだし鼓膜にきつく響くし、解しかねて往生した。文脈を辿ってみて、氷解した。「タンペイキユウ」のことであった。老婦人の生まれ育った地縁集団では、「いきなり」とか「だしぬけに」とかいう和語よりも、「短兵急」

という漢語もどきのほうが、日常用語であつたらしい。それが、土地の訛りで「タツペキユ」となり、ことばを(文字によって)目で習得することなく、耳から入ったままに覚えた彼女にとっては、聞いたとおりに口でなぞることが生活語なのであつた。「学校は字を習いに行く所」だという土地柄、時代柄。そこに生まれ合わせた世代。字こそ習いに行けなかったが、漢語なら、耳学問ながらも世間に伍して操り、見事な年輪を重ねてきた人であつた。

「短兵急」——重厚なことばである。タンペイとキユウという二つの音、そこには、刀剣といい突如という個々の意味を内蔵し、これらの二語が熟して成り立つ和製漢語である。音と意味とを兼ね備えるというこの二重機能、そこに漢語の重厚なる所以がある。

近来の風潮は、漢語の重厚さに堪えられないのか。それとも「前代の長物」と疎外してかかるのか。ともあれ、漢語・漢文の置かれた現況に鑑みるに、「日本文化の母胎」という名を笠に着て、高を括っているわけにはいかななくなってきたようだ。「療原の火」を思い浮かべるのは考え過ぎかよくよく自戒してかからないと、地位の安危を問われかねまい。老婦人の声が聞こえてくる——「そのタツペキユなことといったら、お前さん」。

ほしの しろう 元千葉県立千葉東高校教諭。日本芸術院会員  
土屋竹雨先生の門下で漢詩を学ぶ。現在、東京都内の航空会社  
や団体などで漢詩講座を開いている